

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年二月廿日印刷納本 昭和二十一年三月一日發行

第十二卷 第一號

淨

土

三 月 號

同胞に與ふ

眞野正順

隨筆春の言葉

吉田絃二郎

どうして生きてたら良いか

中村辨康

詩 寒 山 藏原伸二郎

小説 閻魔秘帖 草田直宗

牛乳の科學 中西武雄

有髮のまままで 村田嘉久子

春^{はる}の言^{こと}葉^は

吉 田 絃 二 郎

進駐のアメリカ兵はみんな小型の聖書を支給されてゐる。かれ等は戦場に於いても、朝夕の祈りを持つこと、また禮拜を持つことさへ教へられ、習慣つけられてゐた。

北陸のわが一師團長は出征に先立ち、念佛など唱へるなと訓示したといふことである。

父祖このかた念佛によつて育て上げられて來た北陸の建兒たちは一大事の場合に臨んで、一番大事な信仰を失つてゐた。

今度の戦さは信仰を持てる兵と、信仰を失つた兵の戦さであつた。

ウォータルロウの戦さの前夜英將ウェリントン^{ウェリントン}は靜かに聖書を讀んでゐた。佛のナポレオンは焦燥しつゝ室内を歩きまはつてゐた。

日本がこんな窮境に陥つた一つの原因は宗教心を失つてゐたことである。今後いかに民主的な政治組織が成り立ちうとも、國民の一人々々が虔虚な宗教精神を身につけない

かぎりには、眞の尊敬すべき民族とはなり得ない。

今朝の朝日新聞にはシンガポール陷落の折の、わが山下將軍のパーシヴァル將軍に對して執つた態度と、乃木將軍のステッセル將軍に對しての、それとを比較した感想が載せられてあつた。まことに今度の戦さには一人の乃木將軍をも見出すこともできなかつた。乃木將軍が學習院の院長時代、雨の日は迎^{むか}への馬を辭してゐたことは知る人もあらう。乃木さんが殉死の朝、厩舎^{うまや}に行つて愛馬にわかれを惜しんだことも人の知るところである。畜生をいつくしむ乃木さんであればこそ、ステッセル將軍に對しても武士道的なやさしさを示すことができたのだ。

萬一、乃木さんが旅順に敗けたとしても、心ある日本人は乃木さんを責めなかつたであらう。

今度の戦さに敗けたことは當然の事であるとしても、その敗け振りがいかにもきたない。誠の日本武士の戦ひ方をしてゐないのが残念である。平家は敗けても同情を持たれ

る。源家は勝つても同情を失つた。なさを知らず、ものあはれを知らぬやうになつては民族も末である。この民族的缺陷を補ふためには神佛をおそるる念を養ふ他に道はない。

神を敬し佛を信する者には敵もない。戦さもない。

アメリカの兵隊たちが戦場の迷ひ犬までもマスコットとしてはぐくみ育てゝゐる姿と、日本の人たちが犬を殺せ犬を殺せと叫んで、路傍に犬の死骸を積み重ねた姿を思ひくらべて見るがいゝ。米不足の折から止むを得ないことであるとしてもいつべんの念佛を唱へて、この可憐な、忠實な畜生を靜かに眠らせてやるだけのやさしさが民族精神の中に潜んでゐたであらうか。

ことしは戌の歳である。少し犬のことについて書かう。いつか三宅雪嶺先生のお伴をして加賀の金澤へ講演に行つたことがある。花圃夫人も御一緒であつた。汽車の中のいろ／＼なお話から、夫人がひどく犬が好きでおゐのことを知つたので、東京へもどつたら、わたくしの家の仔犬の寫眞でもお目にかかけようかななどと、考へたこともあつたが、その中に夫人はお亡くなりになり、先生もさきごろ簀を易へられた。

もう二十年も前のことであるが、二正の野良犬が縁の下

にもぐり込んでゐた。食物をやつてゐる間に愛情もわいて來たのであつたが、一日家を留守にした間に犬殺しに連れられて行つた。今でも思ひ出しては暗い心になることもある。

歌舞伎座で、私の「沙門空海」を歌右衛門が演じたをり、彦三郎が獵夫をやり、白と黒の日本犬を舞臺に引いて來るところがあつて、一正は甲州から、一正は常陸から探し出して來た。彦三郎は二六時中二正の犬を手もとから離さず、夜は自分の寢室に眠らせてゐた。彦三郎が犬をあまりに、大事に可愛がるので、弟子たちは「二人の坊つちゃんが出来たやうだ」といつて、大分閉口したといふ話を聞いた。彦三郎も故人になつてしまつた。

私の知人に愛犬家がある。かれは十年ばかり前に一正の犬を亡くしたが、それ以來犬を飼はない。そして十年前と同じやうに、その犬の寫眞をポケットにしのはせてゐる。

さらに他の友人は最初は犬に關心を持たなかつたが、一度飼つてからは、犬に對して新たな感情を抱くやうになつた。戦時中、犬を供出しなければならなくなつた時、愛犬をすつかり洗ひ淨めてやり、六十幾歳のかれは、一晩中、犬を抱きしめて寝た。今日でもかれは警察へ引かれて行つた犬の姿を思ひ出しては涙ぐむ。劍道何段、柔道何段の猛

者であるが。

これは鳥の話であるが、戦時中、鶴渡來地の鶴を殺せといふ議論があつたり、土鳩を撃てといふ新聞記事もたびたび目についた。

庭に來て鳴いてゐる小鳥を見て「お宅に空氣銃はありま

せんか」と、友人の家を訪れた男が言つた由。友人は憤慨してゐた。この客に似た男が日本には餘りに多い。この心を改めなければならぬ。

「物いはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親子を思ふ」(源實朝)

入信 實話 亡き父母の愛

一 讀者

一體私の過去は信仰について全くゼロであつた。

年に渡る疲勞のため、三年前四十五歳にして突如腦溢血に襲はれ、

その主なる理由は何故に神佛を信仰すべきか、信仰せば如何なる

一切の事業を放棄してひたすら療養しなければならぬ境遇に落ち込んだものである。

眞理があつて人々に利益を授けらるゝか等の命題に對し具體的に解釋を得ることが出来なかつた事

と、今一つは何不自由なくこの世に育ち、成人してから何の不幸にも遭遇せず、餘りに順調過ぎた

爲め更に信仰心等起らなかつたのである。そして奔放自由に振舞過ぎたその結果、頭の使ひ過ぎと長

偶々或日野外にスケッチに出掛けた時の事である。青い芝生の上に仰臥して瞑想にふけつた事があ

その時、自分の不遇をかこちながら亡き父母を想ひ出した。今自分が半身不隨の身となつてゐることを誰が何が一番心配して呉れてゐるだらうか。

だ、この両親の愛に頼らう。と、スケッチもやらすそこへ歸宅して佛間に入り祖先に香をたいて合掌し、ひたすら病氣全快の祈願をしたものである。

ア、それは亡き父母である。一寸した腹痛にも寢食を忘れて心配し看護して呉れた両親である。今は佛となつてゐる両親は彼の世で愛兒の……自分の病氣をどれ程心痛してゐて呉れるだらうか、自分の病氣全快を希願するものは自分の両親ほど熾烈なるものは恐らく、他にはないであらう、と今は亡き父母を想ひ親の洪大無邊なる愛に浸る想ひをした。

亡き両親は今佛となつてゐて、阿彌陀様の身近に只管仕へる佛である。この佛に佛の利益に浸ることが出来るやうになつたと同時に、身體の工合も漸次恢復して常態にかへることを確信出来る様になつて、全くの絶望から希望の日を送ることが出来る様になつた。

あゝこの時私の信仰心は突然として開眼したのである。オムさう

と確信してゐる。更にこの両親の佛力を育み賜ふ大御親たる阿彌陀様に合掌する。

信 仰 相 談

擔當 中 村 辨 康

どうして生きてたら良いか

問

私は永らく浄土を讀ませて頂き色々御指導を得た者ですが、いま國が敗れて家もやかれまた食糧にも困つて居る現實を如何に生き抜いたら宜いでせうか。阿彌陀様におすがりして一切をおまかせして居ればよいと思ひますが、それでもまだ割り切れないものがあります。何とか御指示が頂けたら有難うございます。拙ない御質ねですが、是非御願ひ致します。

(東京都内 一信者)

答

御尤もなお尋ねであります。誠に有史以來の大苦難が到來したのですから、國民均しくこの茨の道を辿つて行かねばなりませんし、また一生懸命に生き抜いて行かねばなりません。そこにのみ新日本が建設されて行くで

せう。それは何と云つても御經の中に於ける本當の「兵戈無用」の理想國にならなければなりません。それにはやはりお經にあるやうに國民全衆が「徳を崇め仁を興し禮を務め修む」るやうに努むべきですがそれは決して單なる道德ではなくして眞實の信仰にまつべきでありそれ以外には中々乗つ切れないものと思ひます。阿彌陀様は無量壽光であつて天地の大生命でありますから、この天地の大生命に歸命し隨順するところに、一切の違逆が和順の姿に引き直されることが出来ると思ひます。それは一人の力では成し遂げ得られないかも知れませんが、同信相携へて信力を併せ、その協力せる信仰生活に依つて隨想に清純な渦巻きを巻き起こせば、そこには「崇徳興

仁務修禮讓」の美風が起り「天下和順」し「風雨時を以てする」三寒四溫五風十雨の世の中ともなり得るであります。

かの藤原末期に於て天下亂れ災癘起り兵火に焼け民心不安絶望の絶頂に際して、法然上人が念佛の大衆的信仰を唱導せらるゝや、天下糾然としてこれになびき、やがて人心の不安動搖が靜まつたやうに、眞實の信仰に依つてのみ、かゝりした大國難も乗つ切れるのであらうと思ひます。然し信仰さへあれば手を拱いて居てよいと云ふのはありません。信仰は觀念ではありません。生活であります。行動であります。業務の中の眞實生活であります。念佛は口業に限られて解釋されて居りますが、實際生活には身口意の三業に渡るべきものであります。それですから唯だすがつてさへ居ればよいとか、或は念佛を唱へて居りさへすればよいとか云ふものでなく、力強い如來の大増上緣力に依つて生活に

業務に行動に經濟にすべてを信仰的清純さに引き直して行くべきであると信じます。どうぞお互ひに協力して理想國としての日本を愛し合ひ興隆するやう努力し合つて行きます。

おねがひ

最近時世の急激な變化に、本欄「信仰相談」の質問數が頼みに増加して、残らず御返事してゐては、とても現下の紙量やその他の關係上不可能なので、極く眞面目な、且つ一般に信仰のために有益なものに多く回答するやうに致したい方針です。どうか讀者の皆様も氣まぐれでない、有意義な質問によつて、本欄の充實を心掛けて下さるやうお願い致します。

○

本欄への質問は、本會宛ハガキに住所氏名明記の上、信仰相談係と願ひます。誌上匿名は可。

有^{はつ}髪^つのままで

村田 嘉久子

— 有 髪 の ま ま で —

私が佛門に入る決心をしたことをお聞きになった方のうちには、珍らしいもの好きか、一時の氣紛れかとお笑ひになつた方があつたかもしれません。また、日頃、舞台上演つてゐる尼僧さん達の清らかに靜かな生活を夢に見ての憧れからかと思ひになつた方もあるかもしれません。が、私の發心は昨日今日の思ひ附きからでもなく、尼寺の生活に對する美しい夢からでもありません、因縁が實を結んだとでも申しませうか、幼い時からの望みが漸く叶へられたわけなのです。

私の父は三河の生れで、あちらは、御承知の通り、信心の深い所で、女の子が澤山あれば一人は尼にする家が多かつたさうです。私には兄もあり姉もありましたので、「二番目の娘のお前は尼さんだね」などとよく冗談を言はれたものです。それに、祖父の兄といふ人が品川願行寺の一代であつたり、身内には二三の尼僧さんがあつたりして、どちらを向いても決して佛縁は

少くなかつたのです。父も北品川で大きく店をやつて居りました頃、小さなお寺の本堂位はあらうかと思はれるほどの佛間をしつらへて、そこへ和尚さん達を、お招きして、佛の命日などいつも三部經をあげたり百萬遍念佛を稱へたりしました。さういふ環境に育ちましたから、幼い時からお念佛を唱へる機會も多く、經を誦誦することは屢々でしたし、法然上人の深い教や圓滿な御人柄について説き聞かされることも常のことでした。

「お前は尼さんだね」と人々にかかはれた言葉は何となく根強い力となつて、いつも心の奥底に働いてゐたやうに感じます。とりわけ昨年一月、母を見送りましたからは、一層その感じが深くなつて居りましたところへ、あの震災です。増上寺の大殿が戦火に災上した夜、私の家も焼けて、何一つ残らず灰燼となつてしまひました。焦土に立つてわが家はどこであつたかと求めても、それさへはつきりしないほどに

見渡す限りの焼野ヶ原でした。この時ほど厭離穢土、欣求淨土を身に泌みて感じたことはありませんでした。何もかも大きく變らねばならぬ時だと思ひました。母も見送り家を失つた今では、氣掛りになるものはもうありませんでした。多年求めてゐた道へ出發するにはよい機會だと思つて、とうとう決めてしまひました。

そこで菩提寺の佐藤賢順先生にお願いしてお弟子になり、名も覺心と改めて得度も受け、僧籍へも入れて頂きました。宗務長さんや教學部長さんの御配慮で、昨年の秋には、特別講座の聴講、檢定試験、増上寺の加行といふ順序で、椎尾大僧正から宗脈を授けて頂いて、どうやら佛門入りといふ多年の念願が叶つたわけであります。奎蓮社暢譽微妙覺心といふ結構な法名まで頂き、全く分に過ぎることと有難く存じてゐる次第です。

かうして法名まで頂くと氣分が一新した感じで、何もかも新鮮で嬉しく、私の心持は希望にふくらんでまゐりました。ここで特に御禮を申し上げなくてはなりませんことは、皆様の御厚意で、有髪のままでよろしいといふお許しを得たことです。有髪の尼は宗門としては全く前例のないことと承りましたについて、一層このお計ひを有難く思ふのであります。と申しますのは、

私としては今の氣持から言つて、剃髪いたしま
すことは決して困難ではありませんが、一方、
私の生命である舞台を去り藝苑を退くことは、
とうてい忍び得ないことなのです。有髮のまま
でよろしいといふお許しを得ましたことは、舞
台生活を續けてゆきます上に、誠に好都合であ
りますばかりでなく、有髮の尼として、その方
面に、微力ながら、宗門のため働かせて頂ける
と信じてゐるのでございます。

私は加行を済ませますと、かりした張り切つ
た心持で農村慰問の演劇の旅に出ました。西に

東に慌しい旅を續けました。その慰問旅行の間
に、いつも考へて居りますことは、どうしたら
演劇の根柢に深い宗教味を盛ることができ
か、といふことです。それによらなければ、ほ
んとくに農村の人達な慰めることはできないの
ではありませんか。

そして演ずる者も観る者も、宗教がもつてゐ
る高い情操と限りない悦びをそこから汲みとつ
てゆけるのであつたらどれだけ楽しいことでせ
う。また有難いことでもありません。

私は有髮の、一演劇女性として、私の心の底
に既に住んでゐるみ佛への深い思慕がひととき
でも早く舞臺で表現できる日を待ちのぞんでを
ります。

有髮のままではしたなさもかへりみず、
私の今の心を語らせて頂きました。

會 報

末永く御愛讀の程、お願い致しま
す。

東京都芝區芝公園
淨土宗務所内

購 讀 規 定

信仰によつて正しく明るい靜か
に世をおくることの希望によつて
生れた本誌「淨土」も戦争の急激
により一時休刊してをりましたが
此度再び發行のはこびとなりました

誌代 一部定價五十錢——部數の
關係上最寄の書店へ豫約御注文下
さい。

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

◇暑さ寒さも彼岸まで、梅一輪一

た。原價の暴騰により本誌も誌代
引上げの止むなきに至りました。
當號は十六頁ですが近く増頁の豫
定です。安い値段で一人でも多く
皆様に讀んで頂かうと努力してを
ります。左記購讀規定を御覽の上

會費 一箇年六圓六十錢——一箇
年以上御納入の方を以て會員と致
し、會費の前金切れにならぬ限り
雜誌發行と同時に本會より直接一
部宛御送附致します。(振替送金は
料金十錢御加算願ひます)

輪ほどの暖かさと、昔の人はよ
く言つたものです。日本の氣候
の變化の美しさに進駐軍も心よ
く思つてくれてゐることとでせ
う。戦争の急激のため一時休刊
の止むなきにいたつた淨土も、

いろ／＼の支障を克服して春の
訪れと共に再び芽をふきまし
た。三月號といひ乍ら發行の大
變遅れましたことを幾重にもお
詫び申し上げます。諸機關不備
に加へて非常に多忙にも拘らず
印刷所の方々もみなさまのため
に特別に奉仕して下さつていま
す。我々も本誌向上のため更に
一層の努力を致すつもりですが
讀者の皆様よりもし／＼御批
評、御注文、御感想などを御寄
せ下さるやう御願ひ申上ます。

同胞に與ふ

眞野正順

最近比島からの歸還兵にかり云ふ話を聞いた。

比島の山間に潜伏してゐた我兵が、終戦と共に山を下つて米軍に收容せられた後、或る日、米軍の厨房の裏に堆く捨てられた残飯の山を眺めて、瘦せた我兵の一人がたづねた。

「あの残飯は貰つても、いゝのか」

その時、脊の高い米兵は、上からまとも其兵の顔を見ながら、云つたさうである。

「君が、この島の土人達なら、すぐにでも遣つただらう。然し、昨日まで我々米國人が全力をあげて真剣に戦つて來たその相手に、自分の残飯などを喰べさせる事はできない。それは、我々米國人自身の大きな恥だ。」

わが兵は、唇を噛んで黙つて其場を立去つたといふ。

——これは比島の一挿話ばかりではない。吾々全體はいま紙一重のところに来てゐると思ふ。顛落か、回復か、こゝの精神の持ち方一つ

によつて、回復することの無い半殖民地的民族に、我れと我自ら轉落してしまふのである。

○

私は、現在の私共にとつて、次の三つの心構が必要だと思ふ。

一は、世界に於ける我民族の特殊なる立場と任務とを忘れないことだ。當時、世界の邊陲たる極東にあつて、最も早く泰西の文化に醒め、驚くべき急速さを以て之を吸収して、有色人種

唯一の完全獨立國として新興した吾々の上に、自ら東西綜合による新文化の創建と、それに基づく東方後進諸民族の指導といふ任務がかけられて來たのは極めて自然事であつた。我々もかく自覺し、世界もかく期待した。然るにこの氣高き任務が狀勢に刺戟せられて病的に亢進せしめられ、狹隘なる島國根性と惡むべき政治的操作とに費され、あの固陋にして塊づべき皇道主義に突入せしめられ、この大戦の慘禍を我々の上に招致したのであつた。然し、この主義が

兎にも角にも一部の人心を捉へ得たのは、其根基に我民族の永遠なる課題を隠してゐたからである。たゞそれは惡しく歪められたる鬼子であつた。その故にこそ、我國民を高めることの代りに奈落へと突落したのである。

今や、かゝる固陋の衣を脱ぎ捨て、高明なる世界的精神に更生することが、我々に課せられてゐる要請である。我々はむしろ衷心より喜んで之に隨はう。然し——坊間考へられる如く——たゞあてども無く世界的思想に追隨してゆくことに依て、我々は何を爲し得るのであるか。たゞ我前に與へられたる思想に追隨することは思想的なる一の奴隷である。我々はこゝでも残飯を漁らぬやうにしたい。

我々は過去の謬てる歪曲を拭ひ淨めたる、われ等が頭初の世界的任務に還り來ることが必要である。即ち、あくまで胸を開いて豐饒なる泰西文化を満喫すると共に、饒つて森嚴なるわが東方の光を深く味解するに更に努めねばならぬ。そして、玆にまさに開かれんとする世界渾融の新文化の眞の礎をわが手より寄與せねばならぬ。かゝる崇高なる任務をわが文化行路の上に自覺するとき、初めて我々は世界における公人として新たに立上ることが出来るのである。他日『新たなる世界機構の中に其一員として文

化的に迎へ入れられる』ことの眞の意味に正にこの事を通じてでなければならぬ。

第二に、完全なる「自由」が我々に賦與せらるゝに至つたのは喜ぶべき事であるが、素より自由は欲望の放恣なる發散によつて無秩序なる社會を招致することでない。各人はその行動の一々に完全なる自己責任を感じねばならぬ事は、識者の既に繰返し警告する通りである。然し私は思ふ——單に責任に裏附けられたる自由といふだけでは、未だ本當に自由の能動的意味に達してゐないのではないか。自由はそれに依つて新なる善きものが、こゝに創造されて來るものでなければ意味はない。それを呼出す前提としてのみ完全なる自由の享受は我々に意味がある。然るにこの自發的な創造的能力こそ日本人に久しく缺如してゐたものだ。私はこの危急なる時局に當つて特にこの能力の必要を痛感する者である。

我國の人口七千萬。それが依て以て其數をなした海外殖民地は悉く消失し、明治以前の狹隘なる國土に押し合ひ奪き合つて生きねばならぬのが現在の狀況である。冷靜に考へて、かゝることが果して可能であらうか。茲に於て力を盡してわが乏しき物的資源の開發に努むべきは勿論であるが、然し眞の解決の道はそこに無くて、

却て今その膨大に困惑してゐる人的資源そのものの開發にあると思ふ。簡單に云へば、我國民がその素質と機能とをその内部よりいやが上に研磨し向上せしめて、その一人々々がこの東洋の天地に不可欠なる有用材となることでなければならぬ。これが眞に文化的なる我民族進展の大道である。その爲には、我々は、雜草の如く強靱なる生活意志力と、あらゆる環境に適應せる生活を自ら内部より創り出す創造力と、明敏なる科學的機能をこの身につけねばならぬ。否身に創り出されて來ねばならぬ。かゝる爲の前提としてこそ「自由」は縦横に驅使されるべきである。

最後に私は、いまやこの興亡の大事に忙殺せられつゝある我同胞の頭上に、それとは似ぬ、——悠々たる「天地」と共にある心の靜かに甦り來ることを切に望むものである。復興の大事の如き決して一朝一夕になるものでない。苦難は果しなく、海潮の如く起伏して列つて來るに相違ない。其一つ一つに寧ろ纖細に過ぎる我國民性活潑が翻蕩せられ一明一暗してゐたのでは大事の成就是覺束ない。かゝる危急の反面に於てわが内心の誠を以て天地に向ひ、天地に信じ、目前の成敗に頓着せず、安んじて日々の道を行く、悠然たる宗教心が我々の中に甦つて來て欲

しいと思ふ。眞を云へば、かゝる心に立つ者にして初めて地上の一切は其人に結實するのである。

怒りを抑へた珠數

一 讀者

夕方、いつもの様にとでも電車が混んで押しつ押しされつ、あちこちで聞える悲鳴も毎日のことなので、私はさして氣にもかけませんでした。

「もう少し中の方へ入つてくれ！」と言ふ入口に近い人の叫び聲も癪にさはる位に身動きも出來ません。と、急に横から荒々しく押し分けて來た若い男の泥靴で私の新しい白足袋は、めちや／＼にされてしまひました。その男は私の足を踏んだことに氣がつきながらも平氣で一言の挨拶もせず、すましてゐます。私は痛いやら口惜しいやらで腹立たしさに胸が塞つてしまひました。じつと見つめた私の顔はどんなだつたでせう。

もう少しで、人前も忘れて荒い抗議をする所でした。とたん、吊皮を握つてゐる私の腕に一輪の珠數が、私の心を抑へるかの様に、しづかに輝いてゐました。洗へばなほる足袋、混み合ひはお互ひの事、そんな些細な事でと、珠數を靜かになでました。

牛乳の科學

中 西 武 雄

現代人で牛乳を知らない者はゐないだらう。

が同様にそれがどんな性質を含みどのやうな効力を人間生活に與へてゐるかを知らる者も意外に少いのである。牛乳とはどんな物か、どの位營養價值を持つてゐるか、それを取扱ふ上にはどのやうな注意が必要であるかを述べる事は決して無駄ではないと思ふ。

牛乳は御存知の如く白い液體である。だが微細に觀察すると單なる容液ではなく大きな粒子を含んだコロイドである。つまりこの粒子が蛋白質(カゼイン、ラクトアルブミン)なのである。カゼインとは戰時中木製飛行機の接着劑に用ひられたあれでラクトアルブミンは牛乳を加熱した時表面に薄膜となる物である。この蛋白質と脂肪、乳糖が主要な成分で大部(八割七分)

を占める水の中に含まれてゐる。その他無機成分や枸橼酸、酵素、ビタミン、色素があるが是は一般には左程關聯がないだらう。

牛乳は殆ど全ての營養素を適當の割合に持つてゐて完全に近い食糧である。容易にかつ完全に消化され而もその速度が非常に速い。果物や糖類よりは遅いが牛肉、卵、魚、パンよりは遙かに速いである。牛乳のカロリーは百瓦について六十九カロリーで、つまり一合に約百二十四カロリーが含まれてゐる。だから牛乳だけで生活するとすれば大人は一日に一升七合飲まなくてはならぬのである。

牛乳は腐敗し易く取扱上の不注意がその營養價を著しく減じさせる。第一に清潔な容器に入れる事、第二は日光の當らぬ或可く温度の低い

處に置く事、第三には加熱殺菌は八十度瞬間でなければならぬ。第一の點はきまりきつた事だが第二の不注意は往々にして犯し易い。無色の罐で日中配達され牛乳受や上り櫃で直射日光に長くさらされてゐるのはよく見受ける光景だ。

何故それが不可いか。

つまり牛乳成分が變質して營養價值を失ふ——例へば牛乳百瓦の中には普通二庭のビタミンCがあるが直射日光に一時間も當てて置くとそれが殆んど失くなつてしまふ。又温度が高いと色々な雜菌が繁殖して有害になるし乳酸菌が乳糖を分解して營養價を減ずる。乳酸が多くなるとカゼインがかたまつて酸敗乳となり小兒には頗る不適となる。

牛乳の酸敗(所謂腐敗)を見分けるには特有の腐敗臭と酸味によつても良いが少量を煮沸して固まるかどうかをみても良い。固まらなければ概ね大丈夫なのである。だが乳酸菌そのものは決して毒ではなく現にヨーグルト(腐敗乳)の如きは特別に乳酸菌を繁殖させて作つたもの

寒 山

藏 原 伸 二 郎

遠山の背に鱗雲柿色に光る夕べなり。

この夕べ寂寥の道を急ぐ人あり。

しだいに深山に向ふ道なり。

この道の果になにものかある、

かしこに如何なる人生の待つや。

氷れる溪谷のきはまるところ。

累々として寒き岩ら横はるあたり、

大いなる斧を背ひていそぐ樵夫あり。

蒼しくとも尙逞しき男なり。

うすぐらきランプの灯障子に映りて、

そだ燃ゆる爐邊に

幼な兒の笑へる聲ありて、

素朴なる彼が妻の諸焼く匂ひ流れて、

深山の淋びしき家もかくて楽しきかな。

全山の落葉樹林は骨のごとく白く、

佛のごとき夕月は浮かびたり。

である。不可いのはそれに伴つて生ずる雑菌である。

普通一般に販賣されてゐる牛乳は六十三度三十分の低温殺菌か九十五度以上二十分の高温殺菌でそのまゝ飲んで差支へないが近頃は輸送の不圓滑と燃料不足で、殺菌されてゐても時間が経ち過ぎたり乃至殺菌されてゐない場合がある。故に使用前にもう一度加熱して殺菌してみるのが良い。但し加熱は八十度になつたつ直ぐ火を抜かねばならない。前述したやうにビタミンが消失し、ラクトアルブミンも薄い粘膜に變質してその營養價を著しく失つてしまふものである。

最後に母乳と牛乳の成分を比較してみると蛋白質と脂肪は牛乳の方が多量に含まれ乳糖は母乳が大である。つまり甘さが多いのだ。また一般に牛乳と蜜柑を併用すると有害の如く言はれるがこれは杞憂である。唯前記の如く酸が加はるから凝固し易くはなるのである。以上簡略に牛乳の科學を粗述してみた。

小説

閻魔秘帖

草田直宗

ある簀入の宵の事である。閻魔堂の境内は見世物小屋や賣店の呼聲にこつた返してゐた。私も錢湯の歸途その渦へ紛れこんでみたものの湯上りも手傳つて正月と言ふに瞬く間に背中がべとついてきた。息苦しさも増しやつとの事で堂裏の暗がりへ身を逃れた。そこは表の雜沓に比べて別天地のやうに静かだ。誰も居ない。ほつと一息いれると寒風がひんやり襟頸に滲みこんで却つて快い涼しさすら覺えた。ふと何氣なく二三步先を見ると白い巻物が落ちてゐるのである。易者の虎の巻であらうと半ば好奇にかられ拾ひ上げて開かうとした。その時、人の近付く足音がしたので私は何故かそれをあわてて懷へ捻ぢこんでしまつた。中折帽を眞深にかむつたその男は私に聲を掛ける。「鳥渡お尋ねしますが此の邊りで巻物の落ちてゐるのを見なかつたでせうか」私はどさんとして懷手で件の巻物を握り直し「知らんですなあ」と空嘯いた。だが膝はかた／＼鳴り始めてゐる。だつて月明り

に浮んだこの男は何と言ふ容貌の持主なんだろう。バナナみたいな鼻が胸迄垂れ帽子からはみ出る髪の毛は針鼠のやうにびーんとした金色だ。而もあゝ、私は彼の唇の蔭に銀色の牙が光るの迄見てしまつたのである。「そんな筈はないんだが」射すくめる如くぢろ／＼私をみつめる。が諦めて亦表の雜沓へ消え去つた。私は急には動き出せぬ迄に恐怖で縛られてゐた。然し我に歸ると今度は脱兎の勢ひで家にとんでいつた。玄關を上る時も幾度か前後左右を確めたものである。二階に上り戸締りを嚴重にしてからやつと恐る／＼件の巻物を開いた。正直の處何が何やら薩張り分らない。嘗て見た事もない細い文字が——いやそれは文字と呼ぶには餘りにも奇怪である。全くの暗文だつた。だが判らねば判らぬだけに私の好奇心は募つた。かくて謎の文書に取組む私の生活が始つた。著名な語學者の門は大抵叩いて糾してみた。が與へられる物は失望許りである。遂に意を決し自ら繙讀す

る事にした。つまり同じ記號に字を當嵌めて讀んでゆくのである。七年の歳月が水のやうに流れた。既に私の頭には霜の如き齡が降り積り家も空襲で焼かれてしまつた。だが焼夷彈の雨と降るあの夜の感傷を忘れる事は出来ない。防空壕に縮こまりながら私は兎に角その最初の部分を讀みこなし得たからである。そして次々と今その三分の二程迄讀み進む事が出来た。それは何であつたか。一語で言へば實に閻魔大王の議事録である。諸君、だがあの中學の先生が後生大事に抱き廻る俗稱のそれと混同してはならない。真正正銘の閻魔の秘帳である。諸君は嗤ふだらう。馬鹿な今時そんな者がゐるものかと。無理もない私自身も從來それは人智盲昧なる頃の傳説と取り合はなかつた。だが實際此處にある文獻を何としよう。私は唯乏しい我が叡智から導き出された内容の一端を諸君に御紹介して賢明なる判断を待つより以外にない。以下に二三語を書き綴る事にする。一言お斷りするが本書は日記風に認めてあるが私の空しい智識はその原文の忠實な翻譯を許さない。大雑把に掴んだ筋書的な物である事を著書及び讀者に御寛恕を請ひ度いと思ふ。

第一話

黄昏最後の受刑者として一人の女が引かれて来た。小柄な丸顔で片頬には軽い笑窪が結ばれて彼女は如何にも人が好ささうである。大王の側近の人々、——取分け女身の成就仙や鹽塚の老婆達は深い同情の眼差しを注いだ。然るに告發者大山府君は銅製の角板に「夫殺し」と紅の文字を描いて大王の机上へ提出した。例の如く鹽塚の老婆は彼女の着物をはくと鐵鏡の前に立たせた。

と出入りするやうになつたのである。彼は夫の下で働き、大學でも後輩だつたし剩へテニスの選手で毎日曜夫はコートへ連れだしその歸り途必ず家へ呼びこむのであつた。娘時代から異性なんぞとてんで交渉のない彼女はこの若い男にいつか琴線のたわみを見せ始めた。終日テニスを打合つて髪かみの付根に銀色の汗の粒を見せて現れる若い姿は寧ろ艶めかしくさえ感ぜられるのである。いつか女は日吐の宵を待ち焦がれる身にさえなつてゐた。

ここで告發者太山府君は持つてゐる錫杖を傍らに置き長袖をまくりあげて、寢床に仰向きながら青年の面影を點綴してゐる女を三度繰返して鏡へ寫させた。「大王、この前提を記憶してをいて下さい」と強調した。大王は唯微笑を軽く返した。

だが元より内氣な蕾の女である。自分が世に謂ふあの淫らな姦通の玄關にはいらうとしてゐるなぞ思ひも及ばなかつた。そして焦がれる想ひも胸の内側へそつとしまつてをくだけなのである。

或朝夫が凋しぼれた表情で二階から起きてきた。「おい、俺は近頃どうした譯かサツパリ眠れないよ。昨夜など殊更ひどい。階下の柱時計が五時迄打つのをちやんと聞いてしまつた。愈々俺

もあの蒼白い神經衰弱に取憑かれたやうだ」女は讀書とか物思ひとはまるで縁の無い夫故嗤わらひに片付けようとは思つたが餘り眞剣な表情なので黙つてゐた。勿論そんな事は有り得ぬと信じてゐた。だが以來夫の不眠への訴へは朝を告げる鶏けいのときのやうに續くのであつた。

一週間も経た日曜の宵、例の如く夫は青年を伴つて歸つてきた。いつになく明るい口調で「おい今夜は鯨飲馬食くじくばしをやるぞ。そして不眠の虫を追ひ拂つてぐつすり寢てやるんだ」彼女も良い事だと思つたし青年もある悦びも手傳つてまめ／＼しく膳部の仕度にとりかゝつた。盃が幾度か重なつてゆくと夫は遂に酔ひ潰れ、さしだした庭布團ていふだんを枕に正體もなく眠りこんだ。青年は猶盃をつゞけたがやがて足取りも怪しく戻り仕度にかゝつた。玄關の處で彼女は全ゆる想ひを指先にこめて外套をかけてやつた。青年は据つた眸めを上げて「奥さん、あなたは何て素晴らしいんだらう。僕は憂鬱ゆううつですよ。實は最近人の進めで見合をしたものです。處が相手——それは自社の重役の娘なんですがね、いきなり私は結婚と云ふ事を女性の男性への隷屬とは考へません、だから若し結婚しても私は私の自由と希望を要求しますわ、なんと高慢なのでせう。近頃の娘はみんなあれだ。誰が貰つて

やるものか！そこへゆくと奥さんは男が希求してやまない貞淑とあたたかい情愛を自づから備へてゐる、あゝ、許せるもんだつたらなあ：「そして歸つていつた。彼女は暫し茫然と佇むのであつた。我に戻つて二階へ上り杯盤狼藉の跡を片付け始めた。夫は相變らず高鼻である。その顔を覗きこんでクスリと笑つた。こんなにうわばみのやうに眠られるくせに……と呟いてもみた。

だが翌朝降りて來た主人は昨日と變りなく、一睡も出来なかつたとぶり／＼言ふのである。

餘りの事に女も昨夜の態を引き出して詰つてみた。「そんな筈はない。あれは假初の微睡なんだ。お前なんかはこの苦痛が分つてたまるか！」とてんで取合はない、夫が出勤した後女はつく／＼考へてみた。きつと夫は夢の中で時計の打つ音を聞くか乃至は階下で時計が鳴る際だけ偶然眼をさますのであらう。一つ試してやりませうとその夜、夫が二階の床へ就いて暫くすると彼女は床から起き上つた。彼等は階上階下に岐れて寝る習慣だつた。時計は丁度十時を指してゐる。彼女はそつと時計の蓋を開け指でその長針をぐるり一廻轉させた。音は高らかに十一を刻む。十分程そして床にもぐりまた起直つて一廻轉させる。今度は十二を打つ。か

くて實際の時間が十一時半になる頃迄に時計は五時迄打ち終つてしまつた。更に暫く容子を伺ひ足を忍ばせて二階へ上つてみた。果して夫は寢息も安らかに深い睡りに落ちこんでゐる。馬鹿らしい——女は軽い憤りさへ覺えた。だから翌朝手ぐすね引いて夫の降りてくるのを待つた。

「あゝ、もう俺は破滅だ。今迄はな、眠れぬと決めこんでゐる爲にこんな結果なのかと自分で慰めてゐた。處がどうだ。思ひ出してもゾツとする。昨夜は真正銘だつた。聞き乍ら頬を抓つてみたが正しく夢ではない。あゝもう全てが終局へきた——頭を抱へやがてひつひつと嘔迄擧げて泣き出すのである。女は事の真相を打明け、事實はちやんと七時間も眠つてゐると切り出す事が出来なかつた。餘りに試みの藥が効き過ぎたからである。彼等の營みは益々暗虚の沼の深みへ沈んでいつた。夫の不眠の訴へは勿論くり返される。而も女が毎夜起つて時計の針を廻す習慣も續けられるのであつた。深夜寢亂れた髪に青い手を柱時計につゝこんでゐる女の姿が鏡には大寫して出た。女はそこでうなだれて顔をあげる事が出来ぬ。

太山府君は胸を張つて大王の周圍の人々を見廻した。

やがて悲劇の終末が訪れた。夫は或日同僚に抱きかゝえられて歸つてきた。今日會社で大量の血を吐いたと言ふのである。直ぐ二階の床に横へられた。駛せつけた醫師は暗い表情で女を物蔭に呼び、暴飲暴食の爲胃腸がさくろのやうに瀾れて希みがないから諦めるやうにと宣告した。爾來女は夜の目も寢ずに看護の限りをつくした。深夜時計を廻す行爲を中絶したのは言ふ迄もなく剩へあの柱時計も外させてしまつた。だが夫の不眠はこの頃既に眞物になつてゐた。脇で眠る女は幾度か髪を掴まれて眞夜中引き起された。歲月の歩みは恰も夫の生命を刻刻食んで進むに似てゐた。やがて骨と皮の形骸に化した時、散る花の餘りに儚ない譬へそのまに夫は他界していつた。太山府君は論告を始めた。「憎むべき罪惡です。然もこの合理的な殺人の手段は人間の法廷では摘發し得ない處です。それを摘發し糾弾するのが閻魔の廳の使命ではありませんか——だがそのとき成就仙女史が細かな情愛を明晰な額に漾へて靜かに立上つた——一概にこの女を殺害者と見る事は至當ではありません。爾後の獻身的な看護は償つて餘りがあります。例の行爲は弱い女の過失と見る可きでせう」と辯護した。その心水の如しと言はれる賢者五大道神も彼女の説を支持して

大王に女の夫死後の生活を寫す事を提議した。大王は納れて再び女は鏡の前に連れ出された。女は寡婦となつて以來慣^なしい生活を送つてゐる。かの青年とどうのなどと云ふ痕迹は微塵もない。

例の青年はいつかあれ程罵倒した重役の娘と新家庭を営んでさえ居た。この女にとつて有利な叙景が次々とくりひろげられてゆく。成就仙女史は無罪を主張する。然し太山府君も女が自ら夫を手にかけて罪への積極的な反省が認められぬと主張してゆずらない。二人の論争は何時果てるとも知らなかつた。遂に閻魔大王が口を開いた。頬には淡い慨嘆と深い慈悲を交々たへて

「兩人共それ迄にせよ。あゝ人間と云ふ生物は何と餘計な事をしてくれるものか。女よ。汝は自ら夫を殺したと思ふか」「いゝえ」「では深夜あのやうに夫の弱味を衝く行爲を悪い事だと思はなかつたか」「思ひました。でもどうにもなりません。誰も留めてはくれないのです。」「若い男の事をやりながら考へてゐたか」「はい、でもかうして夫を殺してからだと順序立てて考へた事は一度もありません。あの方の事はまるつきり別でした、さうです、それに時計を廻してゐる私自身も全然別な者でした。私は

只動かす爲だけに時計の針を廻したやうなものです」「大王は大きく頷いて「さうだ。お前に夫など殺せる道理はない。お前は元々自身の意志など持合せてゐないのだ。いや人の世の婦人は往々にして此の類ひに充ちてゐる。人間が生きて何を爲さねばならぬかを考へようとすらないのだ。唯泣いて笑つて驚いて貴い人生を食べる爲に弄んで終へてゆく。閻魔の府はさうした者共を收容する餘地はない。餘りに忙しいのだ。だからお前はもう一度人の世に戻つて生き直して來い。さうだ。お前を木製の鳩にしてやらう。お前が四十八年の生涯に唯一つ爲し得た事、つまり時を打つ事、それを時計の上にとまつて生涯くり返して見るが良い。お前は弄んだ時間の正しい觀念を胸にしつかり取戻して更に併せて人は、女は何の爲に生くるかを深く考へてくるのだ」かくて大王の審判は終結を告げた。

女は毘那夜迦氏の鐵棒に追ひまくられて再び三途の河を人の世に戻つていつた。そして爾來彼女は柱時計の上に蹲つて日毎夜毎「ぼつぽを——」と時を告げてをらねばならなかつた。

——了——

原稿募集

信仰實話・信仰體驗談

原稿募集

○あなた御自身の信仰體驗、または直接に見聞された信仰篤き人の話を、讀物として興味深く讀めるやうにお書き下さい。

○四千字詰原稿用紙四枚以内のこと。封筒に應募原稿と明記し、原稿にも住所氏名を明記して下さい。(紙上匿名は可)

○毎月二十日でメ切り、採用の分は翌々月號に發表します。

○掲載原稿には薄謝を呈します。

○送り先は本會「淨土」編集部

編輯後記

◆事務所職災等の爲暫時休刊を餘儀なくされてゐた本誌もこゝに再生の緒に就くを得ました。用紙の關係上猶かくの如き小誌には過ぎませんが携はる者としては感慨深いものがあります。近々に増頁の豫定をります。

◆永い戦亂で祖國も同胞もみくたくされ然も猶明日には飢餓と困苦が我々を待受けてゐるのです。この重壓に應へて生き抜いて行く

爲に宗教的信仰生活がどれ程肝要であるか、多言を要す迄もない事でせう。本誌としては大衆を明る

い慰安を與へる中に導いてゆく本領を今後益々發揮して行きたいと念じてゐます。

◆吉田、眞野、中村諸先生を始め本誌關係の方々も皆元氣に戦後復興への道を歩んでをられます。唯前任の編輯者村瀬秀雄氏が應召の儘北鮮にをられる身が案ぜられます。今頃遠い故山の星をどのやうにして偲んでゐるでせうか。

◆いやそれにも増して本會構成の

近刊豫告

吉田絃二郎著

隨筆集

B6判
二〇〇頁

本誌を通じて周知の如き著者の深い宗教的悟性と藝術的香氣溢れる珠玉篇

發行所 船形書院
取次所 法然上人鑽仰會

主流をなしてゐる海外開教區の會員の皆様は、照る日曇る日につけて胸がしめつけられる思ひを湧かせてをります。

◆懐しい舊會員の皆さま、いつもならばあなた方のお手許へ直に届く筈が、今或は書店の一角にあな

たの「浄土」を見出されたかも知れません。發送簿の一部焼失等の爲このやうな始末になりました

あの路頭に迷ふ浮浪の愛兒をしつかり胸に抱きしめる母の心で早速再入會の手續きをお取り下さい。

また新たに御入會下さる方々にも六頁の購讀規定を熟讀なされ御便法を選んで御愛顧下さいませ。

◆新生第一號は吉田先生の深い悟性にあふれた文藻、眞野中村兩先生

の玉稿、また村田嘉久子女史の特異なる入信記、その外小説科學等小誌の中にも家庭への一燈となり得たと秘かに誇るものであります。御味讀を願ひ上げます。

(成田有恒記)

浄土 三月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和二十二年二月二十日印刷納本

昭和二十二年三月一日發行

(定價五十錢)

編輯兼眞野正順
發行人眞野正順

東京都芝區芝公園淨土宗務所
印刷人村瀬秀雄

東京都牛込區市谷加賀町一ノ二二
(東京二)

印刷所大日本印刷株式會社

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園淨土宗務所
振替東京八二一八七番
會員番號一三〇〇〇二

會費 一ケ年 金六圓六〇錢
(送料共)

振替拂込みはすべて十錢増のこと

定價金五十錢(送料共)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十二年二月二十日印刷納本・昭和二十二年三月一日發行

浄土

第十二卷 第一號